【コメント】

今井 祐子 IMAI Yūko
福井大学教育地域科学部

ベネディクト修道院における数年間の修道士としての体験、および手仕事によって工芸品を作るギルドの世界と、最先端技術を用いた情報機器を生み出すハイテク産業の領域という、２つの対照的な仕事場でのご経験を踏まえてまとめられた今回のご発表でクレイトン氏は、手仕事の意義を確認された。そして、その意義を簡潔に述べれば、「工芸には、伝統の保存・継承以外にも、現代生活の質を向上させるために果たすべき役割がある」ということになると思われる。また経済的・社会的な側面からの研究や調査報告を引いて、より広い枠の中で工芸を見つめ直す氏が、「工芸の将来を考える際には、工芸それ自体よりも大きな考えに依存すべきだ」と考え、人間の幸福追求、労働問題、地域経済の発展、個人と共同体との調和など、実に様々な問題を今日的な意味で考察しておられる点は、興味深い。

そして、そのような観点から工芸の将来を考えるには、工芸の持つ二つの要素（用と美）を我々の生活、ひいては現代社会一般に見られる問題と関係づけて検討する必要があるが、過去の歴史に照らして考えれば、こうした姿勢は何ら新しいものではないだろう。しかし、それにもかかわらずこの度の氏のご発表が耳目を集めに足る理由は、単に世俗的な視点を導入するだけに留まらず、人間の行動の本質を捉え直そうとしている点であると思われる。科学技術の進歩が著しい今日、効率優先であらゆることがスピード化・仮想現実化されているために、目先のことにだけに気をとられて、人々が十分な時間をかけて物事を考えることが少なくなったこと、つまり熟慮する時間の欠如を問題視している点は、現代に特有の問題提起をしているという意味において重要である。また、生態系との関係から、人間と自然環境との関係が希薄化していることを憂慮する視点も、同様に重要である。

とりわけ、デジタル機器に囲まれた現代人の生活が、重量・手ざわり・香りなどを感じ取ることなしに、情報を処理していく傾向が強いことに注目し、こうした現状を改善していくために、いわゆるスローライフと結びつき易い工芸家の技能や思考を取り入れるべきだとする意見は、新しいものではないだろうか。一見すると工芸とデジタルは真っ向から対立しそうだが、氏はそれらが持つ高い芸術的手技と高度な科学技術との間にバランスをもたらすこと、また通り一遍になりがちなデジタル世界に新しい視点を提供することが、工芸家の役割であると述べておられる。「工芸において重きをなすものは、生活の方法だ」と考える氏は、工芸にみる材料美や造形美が彷彿とさせる温もりをデジタルの領域にも生かすことで、もはやデジタル機器の活用を回避できない現代人の生活の質が改善されることを期待しておられるのであろう。確かに、生きる・考える・食べる・嗅ぐなどの人間の自然な心と身体の動きを損なわないものづくりの考え方や、扱う素材や表現に熟知した人

が心を込めて行うものづくりのあり方をハイテク産業へ導入することは、物心両面から我々の生活の質を改善することを可能にするのかもしれない。

単に利便性や美的なデザインを求めるのではなく、よりよい生活を導くという観点から工芸の特性を柔軟に活用することは、工芸の可能性を広めるのみならず、私たちの生活や人生観をも変えることができると思われる。ご発表中に氏がおっしゃったように、「ものをつくるならば、なぜつくるのか」あるいは「ものをつくるだけではなくて、意味のある生活をどうやって伝えていくか」ということについて、現代人は今一度真剣に考える必要があるだろう。伝統の保存・継承というもう一つの問題に関しては、一般の人々の実生活に結びつきにくい高価な工芸品をどうやって生き残らせていくかという課題が残るが、今回のクレイトン氏の発表をきっかけにして、日常生活のレベルでの工芸を基に我々の生活の質についての再考が促されることが期待される。